

キリスト教から考える「現場」の歴史と未来

同志社大学 神学部 教授 小原克博

1. はじめに——「現場」とは

火災（殺人）現場、工事現場など、事件が起こったり、作業が行われたりしている場所を「現場」と呼ぶ他、企業では管理部門に対する実務部門（たとえば、工場）を「現場」と言うことがあり、宗教にとっての「現場」も、これらいずれの用法とも重なるものを見出すことができるだろう。キリスト教に即して考えれば、それはイエスが語り、奇跡や癒やしの業を行った「現場」があり、神学という知的管理体制に対し、社会实践（隣人愛）を行う「現場」があると言える。そうした基本的な「現場」を確認するために、まず新約聖書におけるイエスの語りの特徴（たとえ話、メタファー）を整理する。その上で、現代において、聖書解釈（テキスト）と現場（コンテキスト）の関係を考える手がかりとして、解放の諸神学（ラテンアメリカ解放の神学、黒人神学、フェミニスト神学、荊冠の神学）や文脈化の神学（contextual theology）を取り上げたい。さらに、伝統的な「現場」（現実空間）とは異なる新しい「現場」（ネット空間）が広がっていることにも関心を向けたい。SNSのような情報空間は、伝統的な考え方では「現場」からもっとも遠いところに位置づけられるが、そこで長時間過ごす若い世代にとっては、それこそが「現場」に他ならない。「現場」のバーチャル化が進展する中で、宗教はどのような対応ができるのか、考えてみたい。

2. ホモ・サピエンスの「現場」と虚構（宗教の起源）

宗教的感情はヒト（ホモ・サピエンス）と他の生物種を分けるだけでなく、ヒトの認知的飛躍における分岐点にもなっている。ユヴァル・ノア・ハラリは、それを「認知革命」として以下のように説明している。

伝説や神話、神々、宗教は、認知革命に伴って初めて現れた。それまでも、「気をつけろ！ ライオンだ！」と言える動物や人類種は多くいた。だがホモ・サピエンスは認知革命のおかげで、「ライオンはわが部族の守護霊だ」と言う能力を獲得した。虚構、すなわち架空の事物について語るこの能力こそが、サピエンスの言語の特徴として異彩を放っている。（ユヴァル・ノア・ハラリ『サピエンス全史』（上）、39頁）

「虚構」とは、我々が五感で認知できる現実世界を超えた世界のことである。ライオンマン（写真。ドイツで発見された3万年前の象牙彫刻）のような半神半人の像も虚構であれば、水素原子のHというシンボルも虚構である。しかし、そのいずれも現実世界をよりリアルに把握し、新たな世界像を構築する上で必要な虚構なのである。リアル世界とバーチャル世界を行き来しながら、人間は世界像を構築してきた。



3. 聖書と「現場」

1) イエスのたとえ

- ・虚構の言語的展開→メタファー（隠喩。既知のものから未知のものへと視界を開く）
- ・新約聖書におけるメタファーの源泉としてのイエスのたとえ話

「イエスはこれらのことをみな、たとえを用いて群衆に語られ、たとえを用いないでは何も語られなかった」（マタイによる福音書 13:34）

- ・神話とイエスのたとえの区別

神話の中では、悪人は受けるべき罰を受け、善人は報われる。また、この世にある不条理に対する説明がなされ（たとえば、自然災害や病気などを神罰や因縁によって説明する）、そこから規範や模範が作り出される。

イエスのたとえは神話の対極にある。イエスのたとえは世界に納得と安定を与える説明ではなく、「地上に火を投ずる」（ルカによる福音書 12:49）もの、「剣をもたらし」（マタイによる福音書 10:34）ものだからである。神話や科学はこの世界を説明し、安定させる役割を果たすのに対し、イエスのたとえは世界を不安定にする。

→日常の異化（日常に疑いを投げかけ、世界をこれまでと違った視点から見る）

- ・イエスのたとえのほとんどは、誰もがわかる日常的な素材で構成されており、特別な宗教的知識を前提とはしていない。イエスのたとえは世俗的であり、非宗教的であるとさえ言える。

2) イエスのたとえの一例——善いサマリア人

「善いサマリア人」のたとえは、キリスト教の中心的な教えである「隣人愛」の源泉となった。キリスト教にとって「現場」を考える上でも重要。

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるのでしょうか。」イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、彼は答えた。『「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」とあります。』イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人はだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を歩いて行った。ところが、旅をしていたあるサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨二枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います。』さて、あなたはこの三人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になっ

たと思うか。」律法の専門家は言った。「その人を助けた人です。」そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい。」(ルカによる福音書 10:25-37)

「善いサマリア人」という表現は矛盾に満ちている。当時、ユダヤ人から見て、サマリア人は「悪い者」であり、祭司・レビ人が「善い者」であった。サマリア人とユダヤ人の間に深い対立関係があった。ところが、この物語では、半死半生となったユダヤ人が、その「悪いサマリア人」に助けられ、「善い祭司・レビ人」には見捨てられている。救いや希望は私たちの予想を裏切る形で生じることがあることを、このたとえは暗示している。「善い者」が「悪い者」になり、「悪い者」が「善い者」になるとき、世界は挑戦を受けている。イエスのたとえは世界を不安定にする。

3) 虚構の力とイエスの言葉

人は虚構にとらわれ、その結果、世界をありのまま見るができなくなってしまうこともある。これは、人間に根源的に存在する「認知バイアス」と言える。

あなたがたも聞いておおり、『隣人を愛し、敵を憎め』と命じられている。しかし、わたしは言うておく。敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい。あなたがたの天の父の子となるためである。父は悪人にも善人にも太陽を昇らせ、正しい者にも正しくない者にも雨を降らせてくださるからである。(マタイによる福音書 5:43-45)

4. キリスト教における聖書解釈と現場

1) 聖書の解釈権

聖書の正典化(4世紀)、解釈の主体が教会から個人へ(宗教改革以降)

2) 「現場」(コンテクスト)の再発見——解放の諸神学(1960年代以降)

・ラテンアメリカ解放の神学

貧困や抑圧などを生み出す社会構造が「罪の状態」と見なされ、そうした罪からの解放が重要なテーマとされてきた。貧困・抑圧の「現場」で聖書を読む(キリスト教基礎共同体)。

・黒人解放の神学

アメリカ社会において差別・抑圧される黒人の生が聖書解釈の「現場」となる。黒人神学は、教会や神学が白人中心に形成され、その中で、黒人の黒人性はいつも否定的な形でしか受けとめられてこなかった事実を批判的に洞察し、黒人が黒人であることを喜び、誇りに思うことのできるような価値の転換と社会の変革を目指している。

・フェミニスト神学

フェミニスト神学は、女性解放運動の一部として始まり、伝統的なキリスト教の男性中心主義を批判し、女性の視点からの聖書解釈を進めてきた。

・日本の事例：荊冠の神学(栗林輝夫)、釜ヶ崎と福音(本田哲郎)

3) 文脈化の神学(Contextual Theology)

- ・テキストとコンテキスト（現場）の相互関係——信仰の「土着化」
- ・テキストのコンテキストに対する依存性と超越性

5. 「現場」の未来——現実世界とネット空間

1) 「現場」のバーチャル化

コロナ禍により仮想空間におけるコミュニケーションが拡大。若い世代にとってはネット空間やSNSこそが「現場」。

先述のように、3万年前には、半神半人の像のような複雑な造形物（シンボリズム）も多数作られるようになり、儀礼において使う各種の道具は日常と非日常をつなぐ役割を担っていた。現代バーチャル・リアリティ（VR）や拡張現実（AR）の基本型は、すでに太古の宗教経験の中にあった。

そのことを踏まえれば、「現場」のバーチャル化に臆する必要はない。宗教はリアルな「現場」とバーチャルな「現場」を適切に行き来する作法を教えることができる。

2) カルト問題

虚構の力、バーチャルな力は、物質的な制約を超える可能性を人類に与えたが、同時に、それがリアルから遊離して暴走するとき、とてつもない暴虐や人権蹂躪を生み出してきた。昨今のカルト問題はその一例。宗教2世問題は、その「現場」を家庭内に閉じ込め、孤立させることなく、社会的な「現場」（交流の場）へとつなげていく必要がある。

【参考文献】

小原克博『ビジネス教養として知っておきたい 世界を読み解く「宗教」入門』日本実業出版社、2018年。

山極寿一・小原克博『人類の起源、宗教の誕生——ホモ・サピエンスの「信じる心」が生まれたとき』平凡社新書、2019年。

佐々木閑・小原克博『宗教は現代人を救えるか——仏教の視点、キリスト教の思考』平凡社新書、2020年。

島菌進、釈徹宗、若松 英輔、櫻井義秀、川島堅二、小原 克博『徹底討論！問われる宗教と“カルト”』NHK出版新書、2023年。